

Title	ランボーとマラルメ：或いはモンドール博士への反論
Sub Title	"Rimbaud et Mallarmé", Henri Mondor a-t-il raison?
Author	朝吹, 三吉(Asabuki, Sankichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.17- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0017">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0017</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ランボーとマラルメ

——或いはモンドール博士への反論——

朝 吹 三 吉

フランス近代詩がボードレールを源とし、そこから一つの流れがマラルメを経てヴァレリーにいたり、もう一つの流れがランボーを経てシュールレアリスム詩派につらなる、とする系譜付けが行われてから既に久しい。しかし、このボードレールを頂点とする系図のいはば重要な二本の柱であるマラルメとランボーの関係はどうであったかという問題、特にランボーはマラルメをどう評価したか、何か影響を受けたか、という点については、後に述べるアンリ・モンドールの著作以外、研究らしいものはないようである。佐藤朔先生の還暦記念に際して、ボードレールから深い影響を受けて出発したこの二人の詩人の関係の一面について、わずかながら考えてみたい。

マラルメのランボー観については、一八九六年四月に書かれ、米誌『The Chap Book』に掲載された『アルチュール・ランボー。ハリソン・ローツ氏への手紙』に述べられていることは周知のとおりである。この文章は時にユーモアを交えながら深い省察をふくみ、いかにもマラルメらしい美しい表現にみちているが、中でも最もしばしば引用される言葉は、ランボーを詩の世界（或いは詩壇）の“passant considerable”、「重要な通行人（行きずりの人）」と形容した言葉であろう。即ち、「一時詩の世界へ入って来たが、間もなく別

の世界へ去った人、というほどの意味である。また、ランボーが詩の歴史の中で先人の影響も受けず、後人に影響も残さなかった独自の詩人であったという考えを、“Eclat, lui, d'un météore, allumé sans motif autre que sa présence, issu seul et s'éteignant.” [己れの現存以外の動機なしに燃えたち、孤り<sup>はなれ</sup>奔り、消え去る、流星の、彼は、光芒]という、詩の一節のような表現であらした。更にランボーの文学との訣別を形容した、“celui qui……s'opère, vivant, de la poésie.”も有名である。この最後の文章については、「詩によって生き身のまま手術された男」とする解は、おもしろいイメージを興えはするが、やはり「生き身のまま自己に詩の（切断或いは剔出）手術を施した男」の意味に解すべきだろう。いずれにしろ、このように鋭く美しい、いはば不滅の表現でランボーの像を描き出しながらも、マラルメは留保すべきと考えた点、即ちランボーの影響ということに関しては、はっきりと否定的に述べている。一八九六年といえ、ランボーが詩作をやめてから少くとも二十年後、彼が無名のまま死んでから五年後のことであるが、主にヴェルレーヌの努力によって一八八三年頃からその作品が少しずつ発表されはじめ、いずれも不完全な形ではあるが、一八九一年に韻文詩集、九二年に『イリュミナシオン』と『地獄の季節』がそれぞれ出版され、一八九五年にいたって初めてやや完全な形でランボーの全詩集と銘打たれたものが出版された。こうして啓示されたランボーの詩は若い詩人や文学愛好者に大きな衝撃を与え、そうした空気のことで上記 The Chap Book からマラルメはランボーについて、そしておそらくランボーの若い詩人たちへの影響の問題について、一文を依頼されたものと思われる。前に引用したマラルメの三つの文章が示しているように、マラルメは、この影響はない、ランボーがいなかったとしてもその後のフランス詩の発展には何の変化もなかっただろうと言っている。このマラルメの文は幾つかの讃辞をふくんではいるが、全体の調子は、ヴァレリーも言うとおり、むしろ réserve であると思われる。ランボーの影響について否定的なこのマラルメの言を、いはゆる象徴派の流れに即して——つまり一八七五年あたりから、この文の書かれた一八九六年にいたるまでの時期について——詳しく検討することもまた一つの興味あるテーマであろうが、この小文の目的ではないので、ここでは立ち入らないことにする。

では、ランボーはマラルメをどう評価したかという点、現在のところそれに答える明確な資料は何一つない。推定によって考えるのはかないのである。ランボーの伝記を読むと、一八七〇年の晩秋から冬にかけての時期にランボー（当時十六才になったばかり）がマ

ラルメの詩を朗誦した、という記述がよく出て来る。最も流布したものに例をとれば、遠く戦前の Jean-Marie Carré の “La vie aventureuse de Jean Arthur Rimbaud (一九二六)” から、戦中の Pierre Arnaud “Rimbaud” (一九四三)、最近の Henri Matrasso, Pierre Petitris 共著の “Vie d'Arthur Rimbaud” (一九六二) にいたるまで、みなほぼ同じ記述をして、別に何の説明もせずにあつちりちり片付けている。ところでこれらの記述の根拠は、私の知るかぎり、ランボーの幼友達であつたエルネスト・ドラエーの回想記の一篇 “Souvenirs familiers” p. 72) が唯一のものらしい。ドラエーが挙げてゐる詩句は

Hosannah sur le cistre et sur les encensoirs !

とらう一行である。

これはマラルメの “Les Fleurs” (『花々』) の中の詩句で、第一次『現代高踏詩集』Parasse Contemporain (一八六六) に掲載された時の version である。この『集』のフランス詩史に果たした重要な役割については今更述べる必要もあるまいし、この第一次の『集』に収録された十一篇のマラルメの詩は原文及び邦訳のマラルメ詩集中に『第一次現代高踏詩集』の「詩篇」という分類の下にまとめられている(ただしその中の “Don du poème” ははるか後に発表されたものである) ことも人の知るとおりであろう。

ドラエーのランボーについての回想は、なにしろ約四十年の距りがあるので、不正確な点や誤りもあるようで、必ずしも信用できないが、ランボーがマラルメの上記の詩を誦したという箇所は、前後の事情から考えて信用できそうに思われる。それでは、この『花々』更にそれを含む上記十一篇のマラルメの詩についてランボーはどう考えたか(或いは更に更に翌一八七一年に刊行された第二次『現代高踏詩集』に収録された『エロディアド』の断片を果して読んだか。読んだとしたらどう思ったか)という点になると、前記のドラエーの記述から想像されること、即ち、彼がこの時期に少くともこの詩句を記憶にとどめていたこと、おそらくそれを愛好したらしいこと以外、何も判らないのである。ランボー自身の書いたものにはマラルメの字も出て来ないし、ヴェルレーヌもこの点については何も言っていないからである。判つてゐるのは、地方の文学青年、いや少年であつたランボーが高踏派の詩人たちの作品、そしておそらくは第一次『現代高踏詩集』を愛読したことと、自作の詩が将来刊行されるであろう第何次かの『現代高踏詩集』に載ること

とを願ったことだ。この願望を彼はこの一八七〇年の暮、五月二十四日付のテオドル・バンヴィル宛ての手紙で述べている。周知のようにランボーはこの手紙の中に自作の *Sensation*, *Ophélie*, *Credo in Unam* (後に *Salut et Chair* と改題) の三篇を書き写し、特に *Credo* を『パルナス』に載せてもらえまいかと、未知の *Cher Maître* に少し甘ったるい調子で頼んでいる。バンヴィルはこの手紙を保存はしたが、十五才半の少年詩人の望みはかなえられなかった。

さて、ランボーが読んだと考えられる第一次『現代高踏詩集』にはマラルメをふくめて三十七人の詩人の作品が収録されているが、それら当時の新詩風の代表者たちと目された人々の中には、ボードレール(は有名な『新悪の華』の諸詩篇をここで発表している)、ゴーチエ、バンヴィル、ルコント・ド・リール、エレディア、コペ、シュリ・プリユドム、リラダン、そして更にマラルメ、ヴェルレーヌ、等、錚々たる名前がならんでいる。それでは、ランボーはこれらの詩人たちをどう評価していたかというところ、文学評論を一行も残していない彼の場合はその手紙類を調べるほかはない。そしてこれに最もよく答えてくれるのが、例の有名な「見者の手紙」である。これは翌一八七一年五月十五日付のポール・ドムニーに宛てられた手紙で、ランボーの文学的信条告白と目されており、その中に、彼が過去の幾人かの詩人を痛烈にやっつける一方、自分の尊敬する詩人たちの名を列挙している箇所がある。「詩人は見者、たかねばならない」とする彼は尊敬する先人として、先ずユーゴー、ゴーチエ、ルコント・ド・リール、バンヴィル、特にボードレール(「最初の見者、詩人の王、ほんとうの神」と彼は絶讃する)の名を挙げる。それから第一次『現代高踏詩集』に含まれた他の詩人たちの何人かを「阿呆」「ジャーナリスト」「才人」などというカテゴリーに分けて挙げてゆき、最後に「新しい詩派、いはゆる高踏派に二人の見者がある、アルベール・メラとポール・ヴェルレーヌ——これは真の詩人——だ」と結んでいる。ところで、この手紙には三十人以上のフランス十九世紀の詩人の名が挙げられているのだが、いくら眼を皿のようにして読み返しても、マラルメの名は見つからないのである。失望し、或いは不可解に思った者は少くないはずだ。エミリー・ヌーレ夫人のいう、この「マラルメの名の顕著な(自立つ)不在」を、いったいどう解すべきだろうか？

この問題に対して明確な解釈を下したのは、私の知るかぎり、上記のアンリ・モンドールただ一人である。アカデミー・フランセー

ズ会員で、高名なマラルメ研究者であったモンドール博士は、その著『ランボー、或いは性急な天才』の中で、ランボーは故意に競争者マラルメの名を黙したのだ、と述べている。「ランボーがいかに自分を巧みなペテン師だと思っていたにしても、第一次『現代高踏詩集』の中でまさにマラルメの諸詩篇だけを読まなかったと、いったい誰に信じさせることができる考えたのだろうか?」と言い、この集中のマラルメの詩のすべてに見られる「新風、そして既に現われている、過度に主観的或いは物語的な詩の拒否、これらがランボーをして、この先駆者或いは競争者の名を黙過するように仕向けたのではないだろうか?」と書いている。そして、このランボーの態度に比べてマラルメは、前記 The Chap Book 誌上の文で「彼の詩を読まなかったふりをした男に対して讃辞の出し惜しみをしなかった」と述べている。モンドールはそのランボー論のいたるところで、このようなやり方でマラルメとランボーを対比させ、ランボーに批判的な評家の言を列挙しつつ、毒をふくんだ言い廻しでランボーをけなすことに努めている。「単なる仮説だが」と言いながらも「ランボーは詩句においてマラルメを超えることの難しさを感じたのではないか」と書き、更に「マラルメの完璧と革新によって(精神的に)阻まれたことがランボーの文学放棄の原因である、とまでは言うまいが……」といった調子で筆をすすめている。

モンドール博士のマラルメ研究は貴重な労作であり、私も感謝を惜しまない一人だし、右の博士の推測や仮説が誤りであるという実証的根拠もない。そうした推測や仮説を提出されたことはよいことであり(私もそれに触発されてこの小文を書いているわけだ)、その点でも敬意を表したい。また、或る種のランボー礼讃者には狂信的な過激さがあったから、それへの一種の反動であったのかもしれない。しかし正直なところ、彼のランボー論の書き方には、いささか不愉快の念を禁じ得なかった。それに、この本の特に初めの部分(講演のテキストだということだが)は、マラルメ研究者がいつの間にか身につけたらしい、マラルメ亜流の、もって廻った気障な文章で、まことに読みづらかったことを附記しておく。

では私の考えはどうか。現在の私は、ランボーが「見者の手紙」の中で、故意に、競争者としての嫉視から、マラルメの名を黙したとは考えない。モンドール博士とは反対に、ランボーは言い落したか、関心がなかったかのどちらかだと思う。そう推定する根拠は二つある。第一はマラルメの詩人としての地位の問題である。今日の吾々が考えるマラルメと、一八七一年に人々の眼に映っていたマラ

ルメとは同じではあるまい。今日でこそ彼はフランスの最も偉大な詩人の一人とみなされており、それゆえ彼の名が挙げられていないことは奇異に感じられるかもしれないが、当時は殆ど無名の（詩集ひとつ出版していない）青年にすぎなかったのだ。一方、それに反して、今日では殆ど専門の研究者か学生、或いは軽い読書の対象以外のものでない、詩人としてのゴーチエ、そしてバンヴィル、ルコント・ド・リール、コペ、シュリ・プリュドム、等、ランボーがその名を挙げている人たちは、当時は盛名をさせていた詩人たち、或いは注目の新人であったのであり、称讃するにしろ、批判するにしろ、これから世に出ようとする若い詩人は彼らに対する評価、態度決定を迫られていたのだ。ランボーが「見者の手紙」でしたことはまさにこれであった。自己の編み出した新しい見者の詩法の尺度から見た、過去現在の主として有名な詩人たちの再評価の試みだったのだ。無名のマラルメの名が挙げられていなくても、その意味では何の不思議もないだろう。

第二の点は、マラルメの詩に対するランボーの関心、或いは評価の問題に關してである。世間的に殆ど無名であったとしても、ヴェルレーヌを認めたランボーが（尤もヴェルレーヌは当時既に“*Poèmes saturniens*”と“*Pêres galantes*”の二つの詩集を公刊していたが）、おそらく何篇が読んだにちがいないマラルメの詩の美しさを感じ得しなかつたか、という疑問は誰にも当然浮ぶはずである。

私の答えはこうだ。おそらく或る程度、或る種の美を感じ得しにちがいない。しかしランボーがマラルメの詩に見出したのは特に詩句やイマージュの美しさであつたのではないだろうか。親友とただ二人、何の世間的配慮もなしに、冬空の森を歩きながら少年ランボーが口ずさんだと伝えられているのは『花々』であつた。他の、より思想的な詩篇ではなかつたのだ。そして当時から「見者の手紙」への時期にかけて、ランボーの思想的関心はマラルメのものからますます遠く距つていたはずなのである。

ここでもう一度日付を想起しよう。上述の、『現代高踏詩集』に席を与えてくれというバンヴィル宛ての手紙は一八七〇年五月。バンヴィルやルコント・ド・リールの詩と共にマラルメの詩句を誦したと伝えられるのが、それから六ヶ月後の一八七〇年十二月頃。そして「見者の手紙」は更に六ヶ月後の一八七一年五月である。誰かも言ったように、ランボーにおける時間の経過は常人のそれとは比較にならない。短日月の間に異常な進展を見せるのである。そのうえこの期間はフランスにとつてと同様、ランボーにとつても異常な

出来事の連続であった。普仏戦争の勃発、フランスの敗戦、旧体制(第二帝政)の崩壊、パリ・コミューンの成立、これらをランボーは直接砲撃の戦禍を受けた故郷シャルルヴィルメジエールで、或いはパリへ出かけて、身を以って経験したのだ。この政治的激動期の中で、彼は社会主義的思想に傾倒してゆき、一八七一年の三月頃に「共產主義政体要綱」ともいうべき文章を草したと言われている。周囲の動乱に刺激されてか、ランボーの「わが放浪」がはじまったのもこの時期である。家出を敢行し、いずれも殆ど無一文の状態で、おそらく三度パリへ行き、北方へは二度行き、二度目の時は徒歩でベルギーまで出かけ、新聞記者の職を求めた。居ても立ってもいられなかった感じだ。詩作の面で見れば、一八七〇年の夏から秋にかけては戦争を反映した詩と共に、或る意味で高踏派パルディヤン的な詩も制作されているが、一八七一年に入ると、その前半は苦渋と辛辣の戦鬪的な詩が殆どである(Des Assis, Chant de guerre parisien, Le coeur volé, L'orgie parisienne, Les mains de Jeanne-Marie 等)。そしてここで重要であると思われることは、単に主題や歌いぶりが戦鬪的になっただけでなく、彼の詩観が一変したことだ。その新しい詩観を宣言したのが「見者の手紙」であるが、それに追いつけるようにして約一ヶ月後の六月十日付で同じドムニーに宛てた手紙の中でランボーは、その前の年(一八七〇年)の秋に自作の詩を幾つか書き写してドムニーに与えたのだったが、「それらの詩を全部燃き棄てて下さい」と言っていることだ。つまり、一八七〇年の秋までに書いた自作の詩と、そしておそらくはその根底にあった詩観とを否定しているのである。

この、既成権威打倒と社会革命への情熱に燃え、少くとも一八七〇年秋までの自作の詩風を否定した、いはゆる Rimbaud communiste の時期の最中に書かれた「見者の手紙」の中に、マラルメの名が不在であっても、奇異とするには当たらないのではないか。モンドールの「性急な天才」という形容は、私も或る意味で賛成であるが、ランボーは自分の求めるものを遮二無二追求するその性急さゆえにマラルメの詩の美しさを看過したか、或いは既に忘れ去っていたか、いずれにしろ一八七一年五月には念頭になかったと解すべきではなからうか。であるから、前に記したマラルメの『エロディヤード』の断片が収録されている第2次『現代高踏詩集』が一八七一年の「見者の手紙」以前に刊行され、この集をランボーが読んだとしても、事情は同じであったらう。

一八七一年の五月のランボーはたしかに『高踏派』的なものから遠く距っていたと思われる。ところがやがて夏が来、「見者の手紙」

からちやうど三ヶ月後の八月十五日に、ランボーは再び『高踏派』の首領格のバンヴィルに手紙と共に詩を一篇書き送っている。これはいったいどういうことだろう？ この手紙は前年のに比べて六分の一、わずか十行ほどの短い手紙で、去年と同じ馬鹿者がまた詩を送ります、と言った後、「去年は十七才でした（実際にはランボーは満十五才半だったのだが）。ばくに進歩しましたか」と結んでいる。その詩が“Ce qu'on dit au poète à propos de fleurs”（花に関して詩人に与つ）の一篇である。今度は『現代高踏詩集』に載せてくれとは一言も言っていない。それもその筈だ。内容を荒っぽく要約すれば、「詩人よ、いつまでも百合だ、薔薇だと甘ったるい古文句を繰り返すな」とでもいうものなのだ。それを目くるめくような技法と冗舌で百六十の詩句にわたって吐きちらしている感じである。

この詩をバンヴィルに宛てて書き写しながら、おそらくランボーは一年前の自分の阿諛的な態度を嫌悪を以て思い出すと同時に、かつて自分があこがれ、そして受け容れられなかった、高踏派パルダヤンを嘲罵することに一積残忍な喜びを感じていたのではないだろうか。この詩は少くとも高踏派に対する揶揄、或いは挑戦状と考えられ、ことよつたら絶縁状の意味があつたのかもしれないのである。それとはともかく、この小文に関する点について言えば、この詩の「propos」（託言材料）が花である点に注目したい。そしてランボーが口ずさんだと伝えられるマラルメの唯一の詩句が『花々』からのものであつたことを思い出そう。前述のヌーレ夫人は、この詩におけるランボーの嘲笑が、バンヴィルに対してと同様、マラルメの象徴的な『花々』にも向けられていると解している。そして私も、きっとそうだろう、と考えている。いや、ヌーレ夫人はもちろん、私もまた、この指摘によつて、マラルメをけなそうなどという考えは毛頭ない。ただ、この詩を書いた時、ランボーの脳裡にかつて愛誦したマラルメの詩句が浮んだかもしれない、と考えるだけのことである。モンドール博士もそう考えられたにちがいない。なぜなら、そのジャン・オーブリーとの共編によるブレイヤッド版のマラルメ全集の註に、このランボーの詩がことよつたらマラルメの『花々』のパロディーであるかもしれないと記されているのだから。

マラルメの眼に、ランボーは詩の世界の通行人、行きずりの人と映つた。一生を詩の制作に打込んだマラルメの詩観からすれば確かにそう見えたことだろう。しかし、わずか数年の、短かくはあるが比類ないランボーの詩人としてのキャリアーに眼をかぎる時、ランボーはマラルメの詩に関して、単なる通行人であつた、とも言えるのではないだろうか。

（昭和四十一年十一月）